opusdei.org

黙想:受難の主日 (枝の主日)

黙想のテーマ:「主のエルサレム入城」「ロバはイエスの最も近くにいる」「神がどのように統治するかを理解する」。

主のエルサレム入城

ロバはイエスの最も近くにいる

神がどのように統治するかを理解する

私たちの主は、大いなる喝采の中で エルサレムに入城します。公の場で の称替をいつも拒み、人々が自分を 王にしたいと願ったときに隠れてい た方が、今日、勝利の歓呼の中で聖 都に入ります。死が近いことを知っ て初めて、彼は救い主として歓迎さ れることに同意するのです。イエス は、今喜んで彼を替美している人々 が、間もなく彼を見捨てて受難に追 いやるため、実際の統治は十字架上 から行われることを知っています。 棕櫚(しゅろ)の葉は鞭になり、オ リーブの枝はとげに、歓声は容赦な い嘲笑になるのです。

典礼は、棕櫚の葉の祝福の儀式とミサのテキスト(私たちの主の受難の記述を含む)を用いて、キリストの生涯において、喜びと苦しみがいかに密接に結びついているかを示します。聖ベルナルドは、この日の笑いと嘆きの密接な繋がりを指摘しています。教会は「今日、受難と行列と

の、新しく驚くべき繋がりを私たち に示しています。行列は称賛、受難 は嘆きを生みます| m.。

イエスはエルサレムに入ります。 人々は自分の服を道に敷きます。聖 ホセマリアは言います:「『棕櫚の 葉は、勝利を意味するゆえに敬意を 表すしるしである。主は、十字架上 で死去することによって勝利を得ん ばかりだった。十字架のしるしを以 て死の帝王・悪魔にうち勝たんばか りであった』と聖アウグスティヌス は書いています。キリストは、人々 の心に積りつもった悪意と戦ったが 故に勝利を得、勝利を得たが故に私 たちの平和なのですした。受難の記 述を読むと、多くの人物が登場しま すが、キリストが間もなく勝利に達 することを予想した人は、ほとんど いませんでした。今週、これらの出 来事を追体験しながら、「わたしの 心はどこにあるでしょうか。わたし はこれらの人々の中のだれに似てい

るでしょうか?」[3]と問いかけてみましょう。この数日間、教会は私たちがこれらの重要な出来事をより深く味わうようにと招いています。それらを熟考しながら、私の信仰はどのようなものか自問してみましょう。

イエスの凱旋行列の場面には、もう 一つ印象的な対比があります。人々 の声高で表面的な熱狂の中、私たち の主を運ぶ忠実で従順なロバの静か な姿です。「ロバはエルサレムのイ エスの玉座でした。私たちの主の御 座として仕えることが、どれほど素 晴らしいことか、見てください| Mac イエスの到来を祝うために人々 が道に広げた外套一あるものは、高 価な絹や美しいリネンで作られてい ました一の上を、この謙虚な動物 は、できるだけ優雅に速足で進んで いきます。人々が物を差し出すのに

対し、ロバは自分自身を差し出します。彼は、イエスの身体の穏やかな重みを、粗野な背中に背負っています。人々は、オリーブの枝や棕櫚、月桂樹を振りながら彼のそばを走ります。しかし使徒たちでさえも、ロバほど主の近くにいる者はいません。

聖ホセマリアは言います:「イエス が私の心やあなたの心を支配なさる ためには、それに相応しい場を整え ねばならぬというのであれば、諦め てしまって当然でしょう。しかし、 『「シオンの娘よ、恐れるな。見 よ、お前の王がおいでになる、ろば の子に乗って』(ヨハネ12・15)。 おわかりでしょう。イエスは、わず か一匹の動物を玉座とすることで満 足しておられます。皆さんはどうお 思いでしょうか。主のみ前にあって 口バのような者だと知っても、私は 別に恥ずかしくはありません。『わ たしはあなたの前でロバ(獣)のよ

うにふるまった。あなたがわたしの 右の手を取ってくださるので、常に わたしはみもとにとどまることがで きる』(詩編73・22-33)。 (…) ロ バよりもずっと美しく、器用で野性 味に富んだ動物がたくさんいます。 しかし、キリストは、ご自分を求め る民に王としての姿を見せるため に、ロバに目を留められたのです。 というのも、イエスは計算づくめの ずるさ、冷酷な心、中身のない上辺 だけの美しさなどに対して話す術を お持ちになりません。わが主は、 若々しい心の喜び、気どりのない歩 み、作り声ではない声、清らかな 目、愛情のこもった言葉にすぐ聞き 入る耳を尊重されます。これが主の 支配の意味ですします。

この聖週間の間、私たちも神の声に もっと注意を払いたいと思います。 聴覚だけではなくて、全ての感覚を もって。この期間、私たちの人生に 意味を与えてくれるイエスのしぐ さ、言葉、感情を見逃したくありません。

「イスラエルの王としてキリストに 歓呼の声を上げた人々の心の中は、 実際にはどのようなものだったで しょうか。いうまでもなく、彼らは 自分たちのメシアについての考えを もっていました。それは、預言者が 約束し、長い間待ち望んでいた王が なすべきことについての考えです。 わずか数日後に、エルサレムの群衆 が、イエスに歓呼の声を上げるので はなく、ピラトにこう叫んだのは偶 然ではありません。『十字架につけ ろ』。弟子たちも、イエスのことを 見聞きしていた他の人々とともに、 沈黙を守り、散り散りになりまし た。実際、大部分の人は、イエスが メシアとして、イスラエルの王とし て自らを示そうとしたしかたに失望 しました。これが今日の祭日の中心です」_[6]。

あの日、イエスを棕櫚の葉で迎えた 人々の経験は、イエスについての私 たちの見方や、彼の統治についての 私たちの考え方を助けます。例えば 私たちは、贖いがどのように行われ ているのか、そのペースが明らかに 遅いことに失望することがありま す。時々私たちは、私たちの計画と 神の計画を混同し、神が早く勝利し てほしいと願います。私たちは、神 が私たちの自由や周りの人々の自由 を危うくしないと決意していること を受け入れられません。神の愛は洗 練されており、強要せず、功利的で はありません。例えば民衆の称替を 自分の益のために利用しません。

「しかしその一方で、イエスの心は、また別の道にもあります。イエスと御父だけが知っておられる聖なる道です。『神の身分』から『しも

べの身分』へと向かう道、『死に至 るまで、それも十字架の死に至るま で』 (フィリピ2・6-8) 従順に、自 分を無にするほどへりくだる道で す。真の勝利のためには、神のため の場を設けなければならないこと. 神のための場を設けるには、自分自 身を裸にし、無にするのが唯一の方 法であること、それをイエスは知っ ておられます。黙し、祈り、そして 辱めを受けることです | rm。 そして この道には、イエスの最初の、そし て最も忠実な追随者、イエスの母マ リアがいます。「エルサレム入城の 場面で、イエスが棕櫚の枝をかざす 群衆に大歓迎されたとき、マリアの 姿は見えない。 (…) しかし、ゴル ゴタでの軽蔑からは逃げ出さず、そ こ、『イエスの十字架の傍らに』 立っておいでになる | 181。そして、 わたしたちは、身に余る恵みによっ て、彼女のそばに留まることができ るのです。

- <u>[1]</u> 聖ベルナルド、枝の主日の説教 1,1。
- [<u>2]</u> 聖ホセマリア『知識の香』73 番。
- [3] フランシスコ、受難の主日ミサ 説教、2014年4月13日。
- [4] 聖ホセマリア、家族の集まりの メモ、1965年10月。
- [5] 聖ホセマリア『知識の香』181 番。
- [6] ベネディクト十六世、受難の主日ミサ説教、2012年4月1日。
- [7] フランシスコ、受難の主日ミサ 説教、2019年4月14日。
- [8] 聖ホセマリア『道』507番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-eda-no-shujitsu/(2025/12/15)